日本語・日本事情教育部門

１．日本語研修コース及び日本語研修特別コース

２．短期留学プログラム日本語コース

３．全学向け日本語コース

４．共通教育科目・日本語日本事情科目

１．日本語研修コース及び日本語研修特別コース

《全体概要》

2007 年度、日本語研修コースでは、本学の大学院に進学する教員研修留学生４名を受け入れた。本コースの目的は、日本で生活する上で必要な日本語力及び研究を行う上で必要な基礎的な日本語を習得することである。文型・文法 10 コマ（１コマ：90 分）を基本として、会話、漢字、作文、情報処理、文化の各技能クラスがある。コース修了時の修了発表会では、各学生がスライドを用いて日本語によるスピーチを行う。修了発表における各受講者のスピーチのテーマは以下の通りである。

＜７期 2007 年度後期＞

たいまつ	アルベン・ゴメズ（フィリピン）
私の学校の行事	キン・ニョーニョー・シン（ミャンマー）
橋～学生の夢の実現に向かって～	ベルマ・パタリンフッグ・リチュアル（フィリピン）
私の仕事：教育は自由への入り口	ミレア・ゴメズ・ペナ（コロンビア）

《時間割表》

	月	火	水	木	金
1	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）
2	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）
3	日本語 （漢字）	日本語 （作文）		日本語 （会話）	日本語 （文化）
4	日本語 （情報処理）				

また、日本語研修特別コースは、2007 年度最初の学生（インドネシア）を１名受け入れた。本コースは、大学推薦の研究留学生に対し日本語の授業を行うコースであり、上記の日本語研修コースの日本語（文型・文法）のみを受講する。

以下に、各クラスの概要をまとめる。

《日本語（文型・文法）》

【受講者】５名（非漢字系５名）　【授業時間】10 コマ／週　総コマ数：126 コマ

【担当教員】桑原陽子（コーディネータ）・澤崎幸江・敷田紀子

１）目標

留学生活を送る上で必要な基礎的な日本語を習得する。（『みんなの日本語初級』第１～31 課）

２）方法

（１）授業の進め方

・　原則として２日（４コマ）で、１課を終了した。学習者の様子を見ながら、コーディネータが２週間ごとに詳細なスケジュールを作成し、それに基づいて授業を進めた。

・　『みんなの日本語初級』関連の聴解、問題集等の副教材を適宜使用した。後半は、留学生活に即したロールプレイを作成し会話練習を行った。独自に作成した語彙クイズ、短作文を継続して行い、語彙の定着を図った。また、週１回読解教材を宿題として配布した。

（２）成績・評価

中間テスト（15%）と期末テスト（85%）で、最終成績 60 点以上を合格とする。合格者は、来期、全学日本語コース日本語Ⅱを、不合格の者は、同コース日本語Ⅰを受講する。

３）評価と課題

・　学習態度は５名とも大変良好であり、非常によい雰囲気の中で学習することができた。学習者間の日本語力に大きな差がなく、多種多様なクラス活動を積極的に取り入れることができた。

・　クラス開講以前にかなの補習授業を２回行ったことで、授業開始後の学習がスムーズであった。研修コースの学生は来日直前まで多忙であり、来日以前のかな学習は実際困難である。来日後授業開始までに、かな学習支援を適切に行うことが必要であろう。　（桑原陽子）

《日本語（情報処理）》

【受講者】４名　【授業時間】1 コマ／週　総コマ数：13 コマ　【担当教員】桑原陽子

１）目標

Microsoft word と power point の基本的な使い方を学び、修了発表の資料を作成する。

２）方法

情報処理センターの端末を使用し、Microsoft word と power point の使い方を学習した。教材は、担当教員作成のプリントである。日本語（作文）との連携を深め、修了発表の準備を行った。修了発表資料を評価対象とした。

３）評価と課題

日本語（作文）と連携し、修了発表の準備をスムーズに行うことができた。修了発表の準備には、例年多くの課外補講が必要だったが、今年度は教員の負担を大幅に軽減できた。（桑原陽子）

《日本語（漢字）》

【受講者】４名（非漢字圏４名）　【授業時間】１コマ／週　総コマ数：15 コマ

【担当教員】澤崎幸江

１）目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅰ　漢字　英語版』を使用して、ひらがな・カタカナ・漢字の読み方・書き方を学ぶ。教科書ユニット１～10 の 112 漢字、170 漢字語を習得する。

２）方法

（１）授業の進め方

・　原則として１コマ１ユニットで進んだ。最初の２コマ（２週）で、ひらがなとカタカナの定着を図り、３週目で漢字の成り立ちと基本を説明し、４週目から 10～14 ずつ漢字を学習した。

・　授業では、漢字の読みと書き方を説明し、練習用のプリントを配布して書く練習を行った。

・　カードを使用し、学習済の漢字の読みを繰り返し復習した。随時、ディクテーションを実施した。

・　毎回、前回学習した漢字の読みクイズ、２週前に学習した漢字の書きクイズを実施した。

（２）成績・評価

・　復習クイズ(30%)と期末試験(70%)で総合成績を判断した。全員、出席・態度ともに良好であった。

３）評価と課題

全員が非漢字圏出身で、漢字に興味を持って熱心に学習に取り組んだ。毎回 10 程度の漢字を覚えるのは負担が大きかったと考えられるが、カードを使用し、時にはゲーム的要素も取り入れながら楽しく授業ができた。期末試験では、漢字の読み・書きともに高得点であったが、配点の少ないカタカナの間違いが目立った。今後は適宜カタカナの復習も取り入れるなど、定着を図りたい。

（澤崎幸江）

《日本語（作文）》

【受講者】４名　【授業時間】１コマ／週　総コマ数：13 コマ　【担当教員】今尾ゆき子

１）教科書および授業の目標

・　ハンドアウト（単文作成問題、モデル文、関連語彙等）

・　既習の文法項目や語彙・表現を使って、あるテーマについて文章が作成できることを目指す。修了発表レポートの作成を最終目標とする。

２）方法

・　学期始めに、修了発表のテーマを大まかに決め（「私の仕事、私の学校、私の専門、私の学校の行事」）６つの課題作文の集大成が修了発表レポート作成の基盤となるように、課題を設定する。

・　課題を６つ設定して、Ｑ＆Ａ方式の単文作成とモデル文を参考に文章作成の練習を行う。毎回、作文を提出。添削した作文は口頭発表させ、再度書き直させる。

３）評価と課題

・　出席は全員皆出席、授業態度、成績ともに良好。全員が文章を作成することに熱心で、受講者一人一人が日本語による自己表現をそれぞれに模索し続ける授業となった。

（今尾ゆき子）

《日本語（会話）》

【受講者】４名　【授業時間】１コマ／週　総コマ数：13 コマ　【担当教員】中島清

１）目標

指導教員等との意思疎通を行うために必要な会話力、また、地域社会での生活・交流に必要な会話力を習得させることを目標とする。そのため、『みんなの日本語』の語彙・表現範囲に拘らず、必要とされる語彙表現を柔軟に提示する。

２）授業方法

・　作文用テーマを 15 題提示し、毎週１テーマずつ作文を宿題として課す。
・　授業では毎回、全員が作文に基づき日本語で発表を行い、その発表内容に関して、他の学生が質問しながら、会話を展開させる。作文は添削して返却する。
・　その後、『みんなの日本語』各課５問の即答練習を行う。
・　最後に、日本の歌を紹介、又は『新日本語の基礎』の復習ビデオを使って、より自然な会話を学ぶ。

３）成績評価

成績評価割合は、期末テスト 70%、出席率 15%、作文提出率 15%である。

＜期末テスト内容＞

・　即答試験：質問文 25 問を予めテープに録音しておく。各問解答時間は約 10 秒。録音済テープを流し、別のテープレコーダーでＱＡともに収録・採点する。
・　口頭発表試験：期間中実施した課題作文の 12 題目の中から、２題目を書いた用紙を４枚用意し、学生は発表直前に籤を引く形で、用紙を抜き取る。抜き取った用紙に書かれた２題目の中から題目を選び、１分後に２分間口頭発表する。２分の口頭発表の後、発表内容について質疑応答を行う。

４）評価・課題

４名とも出席率、作文提出率ともに 100%であり、授業態度も大変良好であった。全員が成熟した大人であったし、知的水準も高く、スムーズな授業運営ができた。発表における話題も豊富であった。 特に対処すべき問題はなかった。　（中島清）

《日本語（文化）》

【受講者】４名　【授業時間】１コマ／週　総コマ数：14 コマ　【担当教員】膽吹覚（コーディネータ）、上田美代子（華道）、廣谷幸子（華道）、勝木禮子（書道）、堀川覚右衛門（俳画）、今藤長文喜（三味線）

１）目標

華道、書道、俳画、三味線を、福井県在住の指導者から直接に指導を受けて体験学習することによって、日本の伝統文化に対する理解を深める。

２）授業内容

（ア）華道（池坊）：５コマ

第１回はまず華道とその中の池坊について概説し、道具の使い方を説明した。その後、花を

楽しむことを目的とし、自由花に取り組んだ。第２回は洋花を、第３回は和花を、それぞれ自由花で生けた。第４回は洋花を洋風に生けた。第５回は池坊の本流である生花に挑戦した。基本的な型を指導したあと、正月用の３種生けをした。いずれの回も出来上がった作品をセンター１階に展示し、また、終わった作品（花）は使えるものとそうでないものとに分類し、花を慈しむ心を大切にすることを指導した。

（イ）書道：２コマ

第１回はひらがなとカタカナを書いた。授業のはじめに筆の持ち方や運び方などの基本を指導し、その後、各自の名前をひらがな・カタカナで書く練習をした。第２回は漢字に取り組んだ。講師が持参した作品の中から、受講生が好きな漢字を１文字選び、それを作品に仕上げた。

（ウ）俳画：２コマ

第１回は俳画特有の筆の運び方や絵の具の使い方を学び、その後、課題として「継体天皇」を描く。手本は講師よりいただいたものを複写し、各自に配布した。第２回は来年の干支である「子」を描いた。出来上がった作品は簡易な掛け軸に入れて教室に展示した。

（エ）三味線（今藤流）：５コマ

第１回は講師による三味線の実演にはじまり、三味線の持ち方、音の出し方を練習した。第２回から第４回は「さくら」の演奏を練習した。楽譜は今藤長文喜氏が外国人向きにアレンジし、それに膽吹が意見を加えて、本コースオリジナルの楽譜を作成。第５回は発表会とし、講師を含めた５名による合奏と受講生一人ひとりの独奏をビデオに撮影した。

３）評価と課題

成績は出席状況と各講師からのご意見を総合して判断した。受講生はおおむね意欲的に取り組み、初心者とは思えぬ作品を仕上げる人もいた。講師もこれまでの経験を活かし、指導もより丁寧になったように思う。ただ、俳画は俳句という文学作品を扱うために、受講生にはやや難解であったようである。来期は講師とも相談の上、俳句という枠にとらわれずに俳画を味わう授業をしてみたい。（膽吹覚）

《コース全体についての課題》

2007 年度は全体として非常にスムーズに学習が進んだ。クラス運営上、特に大きな問題は見られなかった。今期の運営上の特徴は２つある。１つ目は、日本語（文型・文法）と日本語（作文）、日本語（情報処理）の３つの連携を深めたことである。２つ目は、修了発表の準備のための個別指導を専任教員が分担して行ったことである。修了発表のための個別指導は、例年日本語（文型・文法）の担当教員（非常勤を含む）が受け持ったが、これを専任教員だけで分担したことにより、学習者は指導を受けやすくなり、指導の効率も上がったように思う。今後もこの方法を継続し、きめ細かな指導を行いたい。

また、今年度は日本語研修特別コースの留学生を１名受け入れた。受け入れはスムーズに行われ、問題は見られなかった。多様な学習者がクラスにいることは望ましいことであり、今後も積極的に受け入れていきたい。（桑原陽子）

２．短期留学プログラム日本語コース

《概要》

このコースは、福井大学と交流協定を締結している大学等から受け入れている短期留学プログラムＡコースの学生が共通科目として受講する日本語コースである。2001年の本プログラム開始以来、年に２回（前期、後期）学生を受け入れていたが、2006年度から年1回後期受け入れのみとなった。2007年度前期は、2006年度後期に受け入れた継続受講者（進級者）を対象に、「日本語初中級」「日本語中級」「日本事情２」と技能別クラス「はじめての作文」「はじめての会話」「はじめての漢字」の６科目が開講された。2007年度後期には16名の新規学生を受け入れ、未習者対象の「初級１」、既習者対象の「初級２」、「初中級」および「日本事情１」「伝統産業」の５科目を開講した。なお、2007年度受け入れ学生は初級のみで中級以上がいなかったため、「日本事情1」の受講者は０であった。

①　2007 年前期

《科目一覧》

科目	教　　員	教　　科　　書	受講者
日本語初中級	桑原陽子　村上洋子 市村葉子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	６名
日本語中級	山中和樹　市村葉子	『日本語中級Ｊ３０１』	６名
日本事情２	膽吹覚	プリント	４名
はじめての漢字	今尾ゆき子	『みんなの日本語初級Ⅰ漢字　英語版』	２名
はじめての作文	山中和樹	『みんなの日本語初級やさしい作文』	４名
はじめての会話	中島清	『みんなの日本語初級Ⅰ』 『みんなの日本語初級Ⅱ』	７名

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
１限		日本事情２			
２限	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	
３限	日本語中級	日本語中級	日本語中級	日本語中級	
		はじめての漢字	はじめての作文	はじめての会話	

《受講者数》

国名／科目	中国	ポーランド	インドネシア	韓国	合計
日本語初中級	4	1	1	0	6
日本語中級	5	0	0	1	6
日本事情２	4	0	0	0	4
はじめての漢字	0	1	1	0	2
はじめての作文	2	1	1	0	4
はじめての会話	5	1	1	0	7
小計	20	4	4	1	29

《授業報告》

１．日本語初中級

・　受講生：６名（漢字圏４名、非漢字圏２名　中国４、インドネシア１、ポーランド１）

・　授業時間：４コマ／週　　総コマ数：57 コマ

・　担当教員：＊桑原陽子　村上洋子、市村葉子（＊コーディネーター）

１）目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』26 課～48 課を終了。初級の基本的な文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

２）方法

（１）教科書『みんなの日本語初級』の取り扱い

・　２日で１課終了。適宜、副教材「書いて覚える文型練習帳」「聴解タスク 25」等を使用する。会話ビデオは可能であれば使用し、時間に余裕がない場合は使用しなかった。各課末の「練習」は宿題とした。

・　各課の新出語彙から 10 語選択し、短作文問題を作成。宿題とする。

・　文法復習の時間を合計４回設け、適宜復習を行った。復習の時間のみ、文ディクテーション（６問）を取り入れた。

（２）教科書以外の活動

・　会話練習（全４回）

『みんなの日本語初級』に縛られず、学習したことを応用して自然な会話ができるようになることを目指し、「会話練習」の時間を４コマ設けた。「会話練習」は市村教員が担当者として全体スケジュールと教案を作成し、授業担当者はそれに基づいて授業を行った。内

容は、絵を見て物語を作るストーリーテリング、ＳＦＪの会話を用いた会話練習、ロールプレイ等である。

・ スピーチ

授業の最初に、毎日一人ずつ短いスピーチを行った。スピーチは、学生が自分で決める自由スピーチや、くじによってスピーチ直前にテーマを与えるくじスピーチなどを適宜行った。

（３）評価

・ 文法復習テスト３回（15%分）＋修了テスト（85%分）

・ 修了テストの内容は、筆記テスト（90 点）＋会話テスト（10 点）

会話テストは、会話練習の授業中に使用したロールプレイから２題出題。うち１題を学習者がくじで選び、教師を相手にロールプレイを行う。採点は、教員全員で行った。当日会話テストに立ち会ったのは教員３名中２名で、立ち会えなかった教員は、会話テストの録音によって後日採点を行った。

3）評価

・ ６名とも授業態度は良好で、高い学習効果を上げることができたと考えている。

・ 会話練習やスピーチなどの活動を取り入れ授業内容の充実を図った。本コースは前年度の後期に始まり、次年度前期で修了する。次学期に本学で日本語学習が継続されないのなら、教科書の学習を進めることを優先させるのではなく、総合力を高めるような活動を積極的に取り入れていくことも考えるべきではないだろうか。（桑原陽子）

２．日本語中級

・ 受講者：６名（中国５名、韓国１名）

・ 授業時間：４コマ／週　総コマ数 55 コマ

・ 担当教員：市村葉子、＊山中和樹（＊コーディネーター）

1）教科書及び授業の目標

・ 教科書：『日本語中級 J301』（スリーエーネットワーク）

・ 初級 300 時間終了程度の人を対象に、中級段階への橋渡しを目的とする。

2）方法

（1）授業方法

各課を４コマで学習するペースで授業を行った。まず「読む前に」で本文に関わる情報を共有し、読みへの興味を深めた後、「本文」を学習した。「本文」ではおおよその大意はつかめる能力があったので、まず「文章の型」、「Ｑ＆Ａ」を用いて学生が正しく内容を理解しているかを確認した。その後、どのような話であったか、筆者の意図はどこにあるかなどを自分の言葉で正しく説明できるような時間を持った。その後精読の中で新出語や文型表現を学習した。「Grammar Notes」では主に表現を使って自分で自由に文を作る練習を行った。その後、「練習」「ことばのネットワーク」、「書いてみよう」「話してみよう」でさらに産出能力の向上を図った。

（2）復習クイズ

各課の最後に自作の復習クイズを用いて新出語、新出文型の定着度を確認し、学習が不十分な点は復習、指導を行った。クイズには必ず１題作文の課題を与え、学生に意見や説明を書かせる機会を設けた。さらに、６課修了時に１課から６課までの中間テストを、期末試験は主に７課から 10 課までを試験範囲とした。

（３）成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで中間試験と期末試験の結果をもとに復習クイズや授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

３）評価と課題

学生はほとんどが中国人ということもあり、学習意欲、能力共に高かったため、『Ｊ３０１』の文章もそれほど問題なく読み取ることができた。結果全員優で学習を修了することができた。

課題として以下の２点が挙げられる。まず、授業内容についてである。先述したように学生は学習能力が高かった。教科書を越えた質疑応答も活発に行われ、こちらが即答できないような場面もあった。このような学生には進度を再度見直し、生教材を使用するなどさらに実用的な日本語を学ぶ機会を与える必要があるであろう。修了アンケートには、「会話を学習する機会がもっと欲しかった」「新聞を読んでみたかった」などの意見もあった。中級レベルは学生の希望に柔軟に対応できると思われるので、今後シラバスを考える際にこのような意見を参考にしていけば、さらに充実した授業ができると思われる。次に、評価についてである。特定の学生ではあったが欠席、大幅遅刻などが見られた。何度か注意することで最後は改善されたが、このような学生に対しての評価の仕方なども教員の間で事前に話し合いが必要であろう。　（市村葉子）

３．日本事情２

・　受講者：４名（中国４名）
・　授業時間：１コマ／週　14 コマ
・　担当教員：膽吹覚

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：プリントを配布（パワーポイント使用）
・　日本で学ぶ外国人留学生がより深く日本を理解することで、日本での留学生活をより円滑に、かつより積極的に過ごせるようになってほしい。

２）方法

（１）授業方法

この科目は共通教育科目「日本事情Ａ」との合同授業である。授業はパワーポイントを使用した講義形式。学習内容は、①日本の象徴、②日本の地理、③福井県の地理、④暦と祝祭日、⑤年中行事と食文化、⑥教育問題、⑦伝統芸能（歌舞伎）、⑧平和と自衛隊、⑨祭り、⑩冠婚葬祭、⑪自然災害、⑫世界遺産、⑬富士山と環境問題、⑭現代日本が抱える諸問題、であった。

（２）復習クイズ

授業の内容から判断して、復習クイズは実施しなかった。

（３）成績及び評価

成績評価は規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで期末試験の結果をもとに授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

３）評価と課題

この授業は共通教育科目との合同授業であるために、学部学生の日本語能力に合わせた授業となってしまった。今期の４名のうち２名はあきらかに日本語能力において、この授業を受けることが困難であった。教員としては、授業ではパワーポイント以外にもＤＶＤなどの視覚教材を多用し、ビジュアルな授業を心がけたつもりであるが、十分ではなかったのではないか、と反省している。今後は、短期留学生だけの日本事情科目を創設することを考える必要があるかもしれない。（膽吹覚）

４．はじめての漢字

・　受講者：２名（インンドネシア１名、ポーランド１名）
・　授業時間：１コマ／週　　総コマ数：15 コマ
・　担当教員：今尾ゆき子

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：『みんなの日本語初級Ｉ漢字　英語版』
・　漢字の読み方、書き方を学ぶ。教科書ユニット 1～10 の 112 漢字、170 漢字語を習得。

２）方法

（１）漢字導入

原則として１コマ１ユニットで進んだ。最初の１コマ（１週目）で、ひらがなとカタカナの定着度を確認し、２コマ目から漢字の学習を行った。宿題として予習プリントを配布して、次回学習項目の予習を課した。授業では、予習を前提として、テキストの漢字の読みと書き練習を行った。第３週からディクテーションを実施した。

（２）復習クイズ

毎回、当該ユニットの復習クイズ（漢字の読みクイズと書きクイズ）とテキスト巻末のクイズを実施した。学生が順次提出した答案は、その場で採点して学生に誤答を指摘し修正させる方法をとった。

（３）成績・評価

毎回のクイズ３種（20%）＋期末テスト（80%）をもとに、総合的に判断した。

３）評価と課題

参加学生は２名とも非漢字圏であり、異形の文字である漢字の形態に興味を持ち熱心に漢字学習に取り組み、習得状況は良好であった。１名は出席・態度、成績ともに優良。他の１名は専門授業の関係で学期後半の出席率が悪かったものの、合格点に達している。

ただし、漢字の読みテストでは、語中（長音欠落：中国（ちゅごく）、上手（じょず）、添加：主人（しゅうじん）、土曜（どうよう））、語末（十（じゅ）、京都（きょうとう））の長音表記に誤答が目立った。漢字習得というよりは拍感覚と拍感覚の問題であろう。

（今尾ゆき子）

５．はじめての作文

・　受講者：４名（インンドネシア１名、ポーランド１名、中国２名）
・　授業時間：１コマ／週　総コマ数：15 コマ
・　担当教員：山中和樹

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：『みんなの日本語初級やさしい作文』
・　初級の語彙や文型を使って、さまざまなテーマで作文を書く。教科書ユニット１～８。

２）方法

（１）授業方法

まず、モデル文を全員で読み、内容をチェックする。語彙・文法項目で疑問があれば、質問させる。次ぎに、作文のポイントに進み、練習問題をする。最後に、各自が作文する。授業中にできないときは宿題として、次回に提出させる。

提出された作文を学生の人数分コピーし、全員で問題点を指摘しあう。学生が問題点を指摘できないときは、教員が指摘する。

問題点が改善された文を各自、清書し、次回に提出する。

（２）成績・評価

出席状況、授業態度、課題提出状況などから総合的に評価する。

３）評価と課題

１名は専門授業の関係で学期後半の出席率が悪く、基準の出席率２／３以上を満たさなかった。ただし、この学生は授業には意欲的に取り組んでいた。その他の学生は出席・態度、成績ともに良好であった。

問題点としては、漢字圏の学生は書くのが早いが、漢字表記に誤りがある（中国の簡体字をそのまま使う）ことと、語彙がどうしても漢語中心となり、カジュアルな作文でも堅い印象を与えてしまうことがあげられる。初歩的な作文ではなるべく和語を使うように指導している。非漢字圏の学生にも漢字の誤りが見られるが、こちらは漢字の定着がまだなされていないことが原因であろう。間違えた漢字をしっかり練習するように指導している。

文法上の誤り（特に助詞）については、随時、まとめ・復習を行っている。また、カタカナの定着が不安な学生もいた。

（山中和樹）

６．はじめての会話

・　受講者：７名（中国５名、インンドネシア１名、ポーランド１名）
・　授業時間：１コマ／週　総コマ数：14 コマ
・　担当教員：中島清

１）教科書及び授業の目標

・　教科書 :『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』
・　指導教員との会話、学外活動での会話において、自分、 趣味、専門などについて話せるように表現や語彙を習得する。

２）方法

教科書にない言葉も使いながら、いろんな表現が出来るように練習する。具体的には、１．毎週あるテーマについて作文を課し、その作文をベースに発表させ、その後他の学生が発表内容について質問をする、２．各課質問への即答練習、３．各課会話の応用練習、の３点が主たる作業である。その他に、「新日本語の基礎Ⅰ」復習ビデオを使い、自然な場面での日本語表現を習得する。日本の歌も５曲紹介・練習した。毎週課す作文は添削して、評価・返却した。

３）評価と課題

最終試験、毎週提出の作文、出席率を総合的に点数化して評価する。最終試験は①25 問の口頭即答試験（各問 10 秒以内に答える）　②あるテーマについての発表と質疑応答試験（３つのテーマをその場で与え、その中の一つのテーマについて１分考えた後発表する）

課題としては、①受講者が多いため、発表の時間が十分取れないこと、②話題が広範囲に及ぶ場合、他の学生が興味を持てないこと、などである。　（中島清）

②　2007 年後期

《科目一覧》

科目	教　　員	教　　科　　書	受講者
日本語初級１	今尾ゆき子　村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	７名
日本語初級２	市村葉子　　村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	４名
初中級	膽吹覚　　市村葉子 村上洋子	『日本語中級Ｊ３０１』	５名
日本事情１	今尾ゆき子	『日本を知る』	０名
伝統産業１	中島清	プリント	16 名

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
２限		日本事情１			
		日本語初級１	日本語初級１	日本語初級１	日本語初級１
３限	日本語初級２	日本語初級２	日本語初級２	日本語初級２	伝統産業１
	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	
４限					

《受講者数》

国名／科目	中国	USA	マレーシア	イラン	フランス	インドネシア	バングラデシュ	合計
初級１	3	0	0	1	1	1	1	7
初級２	3	0	1	0	0	0	0	4
初中級	2	3	0	0	0	0	0	5
日本事情１	0	0	0	0	0	0	0	0
伝統産業１	8	3	1	1	1	1	1	16

《授業》

１．日本語初級１

・　受講生：７名（漢字圏３名、非漢字圏４名　中国３　イラン１　フランス１　インドネシア１　バングラデシュ１）

・　授業時間：４コマ／週　総コマ数：49 コマ

・　担当教員：＊今尾ゆき子、村上洋子　（＊コーディネーター）

１）教科書及び授業の目標

・　テキスト『みんなの日本語初級Ｉ』25 課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。

・　ひらがな・カタカナの導入と定着

２）方法

（１）授業方法

・　原則として２課を３コマで行った。１課を１コマで導入し、３コマ目に２課分の談話練習と運用練習を行った。「会話」部分は、談話練習や復習の時間に 12 回導入した（1, 3, 6, 8, 9, 11, 13, 15, 17, 18, 20, 24 課）。ビデオを使用して、適宜、会話部分の聞き取りクイズを実施。聴解問題はテープを貸し出して宿題とした。

・　復習の時間を５コマ設けてテキストの復習Ａ～Ｅと練習プリントで定着を図った。また、会話運用力をつけるために、当番を決めて、毎回、月日、曜日、天気の板書と週末の出来事などスピーチをさせた。

・　「かな」の導入は、第１週目の４コマで、ひらがな導入（各コマ 10 分程度）。３コマ目でひらがな清音テスト実施。第２週目の２コマでカタカナ導入。ひらがな（濁音・拗音・長音・撥音・促音）とカタカナテスト実施。

・　かな導入（５課終了）後から「語彙クイズとディクテーション」を開始した。語彙クイズ６問とディクテーション４問。10 分程度で５課から 23 課まで 19 回実施。

（２）復習テスト

５課ごとの復習テストを５回実施。

（３）成績および評価

復習テスト５回（15%）と期末テスト（85%）の結果をもとに総合的に判断した。

３）評価と課題

（１）文型・語彙

2006 年度実施の授業に関するアンケート調査において、「語彙の練習が十分ではなかった」、「会話を取り上げてほしい」との要望があり、今期から、語彙クイズと「会話」を入れ込んだ。週４コマで 25 課導入という厳しいスケジュールの中、盛り沢山の感があったが、語彙クイズとディクテーションは、かなの表記や語彙・文型の定着に成果が見られた。また、ビデオ映像を用いた「会話」の導入は、「ぜひ」「そろそろ」といった副詞の理解と運用に効果的であった。

（２）文字習得

７名中５名が既習。２名が未習。授業開始前のひらがなテスト（清音 43 文字）の正答率は７名が 98%、２名が０％であった。しかし、２週間の文字導入期間で、未習者も「ひらがな」の読みができるようになり、文型導入に支障がなくなった。漢字圏・非漢字圏ともに長音（語中：趣味（しゅうみ）、語末：電話番号（でんわばんご）・勉強（べんきょ））表記の不正確が目立った。またカタカナの定着が全般的に不完全で、カタカナ語（外来語）の誤記は学期末まで続いた。正確な表記のための練習が引き続き必要である。

（３）学生の出席率と成績

出席率、成績ともに良好。復習テスト、期末テストの得点率は全員 85%以上。

（４）アンケート調査

アンケート調査を授業の最後に実施した。７名中６名が「授業に満足」、１名が「少し満足」であった。「授業以外にも日本人と話す機会がほしい。日本人の友達を紹介してほしい」「春休みにも開講してほしい」などの要望があった。（今尾ゆき子）

２．日本語初級２

・　受講者：４名（中国３名、マレーシア１名）
・　授業時間：４コマ／週　51 コマ
・　担当教員：市村葉子、村上洋子

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）
・　日本語で簡単なコミュニケーションが出来るようになることを目的とする。

２）方法

（１）授業方法

学習者はある程度の既習歴があったため、最初は復習をしながら様子を見た。結果、形容詞の活用（８課）からの学習を決め、動詞のテ形までは三日で２課、テ形以降を二日で１課のペ

ースで授業を行った。また、５課ごとに復習の機会を持った。最終的に『みんなの日本語初級Ⅱ』の 28 課まで学習した。各課新出語導入、文型練習、談話練習、会話、聴解タスクという一定の流れで教室活動を行った。各課終了後は語彙、文レベルのディクテーションや問題などで、定着度の確認を行った。「日本語Ⅱ」に入ってからは新出語を用いた作文を宿題にした。さらに、時間があるときは同シリーズの「初級で読めるトピック 25」を用いて読解練習を行い、長文を読ませる機会を与えた。

（２）復習クイズ

５課毎に自作の復習クイズを用いて新出語、新出文型の定着度を確認し、学習が不十分な点は復習、指導を行った。

（３）成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで復習クイズと期末試験の結果をもとに授業態度なども考慮して、総合的に判断した。

３）評価と課題

学生は非常に学習意欲が高く、各自学習した項目を復習していたため、授業も効率よく進めることができた。宿題はほぼ 100％の提出率で、試験も毎回 85％以上の高得点だった。クラスの雰囲気も非常によく、発話も活発であったため、お互いに刺激し合えたことも上達につながっていった。宿題で日記を書かせたところ、「もっとやりたい」という要望が出たため、何度か課したところ、単文レベルを超え、文章レベルで分かりやすい日記が書けるようになっていた。「日本語Ⅱ」を学習するようになってから一人ずつスピーチをする機会を与えたのだが、そこでもまとまった話が出来るようになっていった。また、聴解タスクを毎回行っていったため、聴解力も伸び、質疑応答もスムーズに行われた。これらすべては日ごろの学習が確実に習得された結果だと思われる。

今後ますます彼らが楽しみながら能動的に学習して日本語力を向上させていくために、普段の学習が単に知識の習得に終わるのではなく、彼らの実生活につなげていくこと、つまり実際のコミュニケーションや文章レベルで学習の達成感が実感できるような機会を与えて続けていくことが必要である。このように学習を有機的につなげていくことで、日本語学習が生きたものになっていくと考える。（市村葉子）

３．日本語初中級

・　受講者：５名（アメリカ３名、中国２名）
・　授業時間：４コマ／週　49 コマ
・　担当教員：＊膽吹覚、市村葉子、村上洋子　（＊コーディネーター）

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）26 課～46 課まで
・　初中級の日本語の文法、語彙を学び、応用練習をすることによって、日本の社会生活、日常生活を理解し、コミュニケーションができるようになる。

２）方法

（1）授業方法

１科を２日のペースで進めた。第１日目は語彙の導入、練習Ａの前半とそれに該当する練習Ｂ・Ｃを、第２日目は練習Ａの後半とそれに該当する練習Ｂ・Ｃを行った。宿題は第１日目に短文作成プリントを、第２日目には問題のプリントを配布し、それぞれ翌日に回収し、添削して返却した。また、毎日、１人が３分程度の日本語スピーチを担当し、その後、その他の生徒と発表者がそのスピーチに関して日本語で質疑応答する時間を設けた。こうしたスピーチレッスンを経て、今期は 08 年２月 17 日（日）に開催される日本語スピーチコンテスト（福井県国際交流会館）へ受講生５名全員が応募・参加した。結果は１名が本大会へ進むことができた。

（2）復習クイズ

26～31 課、32 課～37 課、38 課～46 課の３回に分けて小テストを実施した。

（3）成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで３度実施した小テストを 20%、期末試験を 80%で換算し、その合計によって評価した。

（4）評価と課題

教科書の語彙や文型導入は円滑に行われたが、スピーチレッスンを導入したことにより、教科書を 50 課まで終えられなかったことは残念であったが、その一方で、スピーチレッスンを導入したことにより、受講生が能動的に授業に参加できたことは大きな収穫であった。導入した文型・語彙は、期末試験を見る限り、ほぼ習得できたと判断してよいであろう。願わくは、次学期の日本語中級において、残りの４課を指導していただければ幸いである。　　（膽吹覚）

４．伝統産業１

・　受講生　：16 名（中国８名　米国３名、マレーシア、イラン、フランス、インドネシア、バングラデシュ各１名）
・　訪問見学回数：６回（１回の見学は授業３コマ相当）
・　担当教員：中島清

１）目標

伝統産業が地域や日本全体の産業技術の発展にどのように関っているのか。家内工業中心である伝統産業がグローバル化にどう対処しているのか。伝統産業を守り、発展させながら、次世代に技術継承するためにどのような課題があるのか。和紙の里、漆器会館、陶芸村など、伝統産業の同業者組合と共同施設の役割はどのようなものなのか。そのような視点から、日本の現代産業の背景にある伝統産業を通して現代の日本社会の理解を深める。

２）方法

福井の伝統工芸である、「越前焼」「越前和紙」「越前漆器」「越前打刀物」等の創作生産現場を６箇所訪問見学する。工房では伝統工芸の歴史、技術、研鑽、課題等について専門家(伝統工芸士)の話を聞く。更に、研修施設での実習も行う。６回の訪問について毎回レポートを提出してもらい、理解の深まりを確認する。

３）評価と課題

成績評価割合：　レポート提出率 50%　出席率 50%

今年度参加者 16 名はレポート提出及び出席ともに全員 100%であった。

・　生産現場を直接訪問し、伝統工芸士から話を聞くので、講義等では得がたい、深い理解と確かな知識が得られている。
・　課題としては、受講者が多いため、訪問先巡回中の説明等が全員に十分聞こえないこと、興味の視点が異なる 16 名が分散行動になることなどである。　（中島清）

《むすび》

2007 年度前期は中国、ポーランド、インドネシア、韓国の４カ国、後期は中国、ＵＳＡ、マレーシア、インドネシア、イラン、フランス、バングラデシュと７カ国からの留学生が短期留学プログラムの日本語・日本事情科目及び伝統産業科目を受講した。

2007 年度後期は、受け入れた 16 名のうち初級レベルと判定された 12 名の日本語能力にばらつきがあり、初級を２クラス開講せざるをえなかった。その結果、中級レベルの学生が１名いたが、予算の関係上、中級クラスを開講することができなかった。その反省を踏まえて、中・上級レベルの学生にも十分な日本語指導ができるように、2008 年度から以下のように日本語科目および日本事情科目を開講することとした。

１）日本語科目（＊新設：④）

「日本語上級」を新設する。「日本語中級」および「日本語上級」は共通教育の日本語科目との合同授業とする。

①日本語初級

②日本語初中級

③日本語中級（前期：日本語Ａ・Ｃ　後期：日本語Ｂ・Ｄと合同授業）

④日本語上級（前期：日本語Ｅ・Ｇ　後期：日本語Ｆ・Ｈと合同授業）

２）日本事情科目（＊新設：③～⑦）

「多文化コミュニケーション１」「多文化コミュニケーション２」「応用日本語１」「応用日本語２」「日本の文化」を新設し、共通教育の日本語・日本文化系科目との合同授業とする。

①日本事情１（後期：日本事情Ｂと合同授業）

②日本事情２（前期：日本事情Ａと合同）

③多文化コミュニケーション１（後期：多文化コミュニケーションＡと合同授業）

④多文化コミュニケーション２（前期：多文化コミュニケーションＢ／Ｃと合同授業）

⑤応用日本語１（後期：応用日本語Ⅱと合同授業）

⑥応用日本語２（前期：応用日本語Ⅰと合同授業）

⑦日本の文化（前期：日本の文化と合同授業）

（今尾ゆき子）

３．全学向け日本語コース

《概要》

このコースは福井大学で学ぶすべての留学生及び外国人研究者を対象とした無料の日本語コース（補習コース）である。

１.科目と時間割

《前期・後期共通》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	日本語Ⅰ	日本語Ⅰ	日本語Ⅰ	日本語Ⅰ	日本語Ⅰ
2	日本語Ⅱ	日本語Ⅱ	日本語Ⅱ	日本語Ⅱ	日本語Ⅱ
3	日本語Ⅲ	日本語Ⅲ	日本語Ⅲ	日本語Ⅲ	
4	日本語Ⅳ	日本語Ⅳ	日本語Ⅳ	日本語Ⅳ	

２．継続受講学生の申し込み・新規受講学生（プレースメントテスト受験者）

《前期》

継続学生対象募集期間　2007 年４月１日～19 日　於国際課

プレースメントテスト　2007 年４月 20 日　実施

		日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
継続学生	登録可能学生数	11	20	11	27	69
	登録者数	5	15	7	20	47
	登録率（%）	45	75	64	74	68
新規学生（ＰＴ受験者数）		2	5	7	5	19
合　計		7	20	14	25	66

※　数字は４月末時点のもの

《後期》

継続学生対象募集期間　2007 年 10 月１日～11 日　於国際課

プレースメントテスト　2007 年 10 月 12 日　実施

		日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
継続学生	登録可能学生数	6	13	18	23	60
	登録者数	3	8	10	11	32
	登録率（%）	50	62	56	48	53

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
新規学生（ＰＴ受験者数）	15	3	3	4	25
合　計	18	11	13	15	57

※　数字は 10 月末時点のもの

３．所属別人数

《前期》

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
工学研究科大学院生	0	13	10	19	42
工学研究科研究生	4	5	0	0	9
工学部	0	0	0	1	1
教育学研究科教員研修生	3	1	0	0	4
短期留学生	0	0	4	5	9
外国人教員・研究者	0	1	0	0	1
合　計	7	20	14	25	66

※　数字は４月時点のもの

《後期》

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
工学研究科大学院生	14	8	10	12	44
工学研究科研究生	2	1	1	0	4
教育学研究科教員研修生	0	2	1	0	3
短期留学生	1	0	1	3	5
外国人教員・研究者	1	0	0	0	1
合　計	18	11	13	15	57

※　数字は 10 月時点のもの

４．コース終了時点での参加人数と減少率

《前期》

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
開始時（４月）	7	20	14	25	66
終了時（７月）	6	13	9	8	36
減少人数	－1	－7	－5	－17	－30
減少率（%）	14	35	36	68	45

《後期》

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
開始時（10 月）	18	11	13	15	57
終了時（１月）	13	7	8	5	33
減人数	－5	－4	－7	－10	－28
減少率（%）	28	36	54	67	49

５．科目別概要

《前期》

①　日本語Ⅰ

・　受講者：６名（中国３名　ペルー１名　イェメン１名　ブラジル１名）

・　授業時間：５コマ／週　61 コマ

・　担当教員：市村葉子＊、澤崎幸江、敷田紀子

・　コーディネーター：今尾ゆき子

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語Ⅰ文法解説書』（スリーエーネットワーク）

・　日本語で簡単なコミュニケーションが出来るようになる。

２）方法

（１）授業方法

今期は実際の表記（特に特殊音）と認識している音とのズレを意識化させることを目標にした。コース最初の３週（10 回）で平仮名片仮名の復習、４週目から主に教科書の文を使用してディクテーションを行った。授業は新出語、文型、練習、談話練習、会話という手順で行った。余裕があるときは聴解練習も取り入れた。授業は 20 課までは３日で２課、20 課以降は２日で１課を終えるペースで進めた。また、３課毎に復習、さらに５課毎に再度復習というように、スパイラル形式で何度も復習を重ねることで、語彙および文型の定着を図った。

（２）復習クイズ

学生の習得度を確認するため、３回の復習クイズを実施した。その結果を基に、習得が不十分と思われる箇所の指導を行なった。

（３）成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで復習クイズと期末試験の結果をもとに授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

３）評価と課題

受講者全員が既習者ということもあり、今期はディクテーションを用いた文字教育を行った。実際、よくできる学生であっても、最初は表記ミスや聞き取りがスムーズにできないといった問題もあったが、回が進むにつれて速く正確に書けるようになった。試験の解答に表記のケアレスミスが少なくなったことも、成果の一つと考えられる。

今後の課題は活用の問題である。14 課以降は様々な文型と活用を組み合わせた表現が出てくるが、特に普通形になると受講者の中でもレベルに差が目立つようになり、全体を整理する時間が十分持てなかったように思う。これらは日本語Ⅱへ進む前に確実に押さえておきたい項目であるため、各活用の規則を習得させ、その上で各表現を体系的に整理していく必要がある。

（市村葉子）

② 日本語Ⅱ

・ 受講者：13 名
・ 授業時間：５コマ／週　62 コマ
・ 担当教員：澤崎幸江＊、高瀬公子、市村葉子、敷田紀子
・ コーディネーター：桑原陽子

１）教科書及び授業の目標

・ 教科書：『みんなの日本語Ⅱ 』『みんなの日本語Ⅱ 文法開設』
・ 『みんなの日本語Ⅰ』修了者を対象に、基本的な文法と語彙、および 200 字程度の漢字を学ぶ。

２）方法

（１）授業方法

１課をおよそ２コマで終えるペースで学習を進め、３課ごろに復習を行なった。会話のビデオや『みんなの日本語 II 聴解タスク 25』を使用しての聴解練習も積極的に取り入れた。漢字については、『みんなの日本語漢字練習帳 I』に出てくる漢字 218 字を学習した。漢字の指導方法としては、フラッシュカードやプリントを使って一日５～６字を導入して「読み」のみを学習し、書く練習は行わなかった。

（２）復習クイズ

期間中３回復習クイズを実施し、受講生の学習事項の定着具合を確認し、その結果に基づいて、適時指導を行った。

（３）成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テストは各５％、期末試験は85％に換算して総合成績を判断した。

３）評価と課題

・　全体的に学生は非常に意欲的で、休んだ授業のプリントを後でもらって提出するなど、各自、今学期合格して次のレベルに進むことを目標に熱心に学習に取り組んでいた。漢字については、非漢字圏の学生も多く、彼らにとっては負担が増したことと思うが、日本での日常生活において基本的な漢字の習得（特に読み）は欠かせないことから、学習意欲も高く、みな熱心に学習に取り組んでいた。

・　反省点については、読解練習が挙げられる。中級クラスへの準備段階として読解練習も行う予定であったが、時間的に余裕がなく、また学生も語いや文法の学習だけで精一杯である様子が見られたため、読解練習はほとんど行えなかった。今後は、比較的短い文章からはじめ、少しずつ長い文章を読めるようにするなど、工夫をしながら読解練習を行っていく必要があるだろう。　（澤崎幸江）

③　日本語Ⅲ

・　受講者：９名（中国７　韓国１　ＵＡＥ１）

・　授業時間：４コマ／週　　総コマ数：51 コマ

・　担当教員：敷田紀子　高瀬公子　村上洋子＊

・　コーディネーター：　山中　和樹

１）教科書及び授業の目標

・　中級へ行こう　（スリーエーネットワーク）
　新日本語の中級　（11 課～20 課）（スリーエーネットワーク）

・　みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ終了程度の学習者を対象に中級段階への橋渡しを目的とする。
　漢字の導入と定着を図る。

２）方法

（１）授業方法

・　メインテキストには「中級へ行こう」を用いたが、週４回では、テキストの量が少ないので、先学期用いた「新日本語の中級」の後半をあわせて用いた。
　授業が単調にならないように、種類の違うテキストを２課ずつ、交互に使用した。「中級へ行こう」では、主に文法や読解、作文を学び、「新日本語の中級」では会話を中心とした授業がなされた。

・　漢字の学習は「みんなの日本語Ⅱ」の漢字テキストをもとに、毎日新しい漢字をフラッシュカードで導入し、練習した。数課ごとに、復習し、定着を図った。

（２）復習テスト

　復習テストを２回実施。

（３）成績および評価

復習テスト２回（10%）と期末テスト（90%）の結果をもとに総合的に判断した。

３）評価と課題

受講者 15 名でスタートしたものの、他の授業やゼミの関係で、毎日出席できる学生は３名と少なかった。それでも都合のつく日には出席する学生が多く、日本語に対する意欲が感じられるクラスだった。

種類の違うテキストを、交互に使用したため、学生には予定表を配布して説明したが、それでもテキストを間違って持ってくる学生がいた。

期末テストの受験者は６名で、全員合格した。授業には積極的に参加したが、今学期で卒業する学生が、単位に関係ないという理由で、試験を受けなかったのは、残念だった。また、週２日しか来られなかった学生は、せっかくテキストを買ったので、ぜひ来学期ももう一度同じコースを勉強したいということで、テストを受けなかった。合格者の６名のうち、４名は日本語Ⅳの受講を希望しており、あとの２名は、今学期で、帰国する。（村上洋子）

④　日本語Ⅳ

・　受講者：8 名（中国４名、ドイツ２名、韓国１名、日本１名）
・　授業時間：４コマ／週　51 コマ
・　担当教員：敷田紀子＊、高瀬公子、村上洋子
・　コーディネーター：膽吹　覚

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：『ニューアプローチ中級基礎編』（日本語研究社教材開発室）、
・　読解力を中心に４機能の実力向上を図るとともに日本人・日本文化の理解を深める。

２）方法

（１）授業方法

・　１課を２コマで終えるペースで授業を進めた。１コマ目は主に文法と語彙の学習を行い、２コマ目は語彙の復習と読解、『ニューアプローチ中級日本語基礎編聞き取り問題集』を使った聴解練習や話し合いを行った。また、教科書を離れた「活動」の回を７回設け、会話練習、作文練習、長文読解、ビデオ視聴などを行った。

（２）成績及び評価

・　成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、その上で期末試験の結果を基にして授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

３）評価と課題

・　期末試験の結果から判断すると、学習目標は達成できたと言える。また、授業方法や内容について随時学生の満足度や希望を確認したが、概ね満足していた。
・　出席率の低さが前学期から問題とされていたので、学生が興味を示す内容で楽しみながら学習できるようにと、毎回の授業に連続する短時間の映画の視聴（13、４回で完結）を組み込んだ。しかし出席数は少なく、その顔ぶれも毎回変わったため途中でこれを打ち切り、カ

リキュラムを変更した。また、一つの課の一日目を休んだ学生が二日目のみ出席した場合、復習に時間がかかるなどの問題点もあった。出席できる曜日の少ない学生のための配慮と工夫をすべきであったのではないかと反省する。

・　来期は出席可能曜日が限定される学生でも出席しやすくなるような授業構成の工夫を望みたい。　（敷田紀子）

《後期》

①　日本語Ⅰ

・　受講者：13 名（中国 11 名、モンゴル１名、タイ１名、）
・　授業時間：５コマ／週　58 コマ
・　担当教員：市村葉子、高瀬公子、村上洋子、齋藤ますみ＊
・　コーディネーター：今尾ゆき子

１）教科書及び授業の目標

・　『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅰ文法解説書』（スリーエーネットワーク）
・　日本語で、簡単なコミュニケーションができるようにする。

２）方法

（１）授業方法

１課をほぼ２回のペースで行い、総復習を含め全７回の復習の時間を設け学習項目の定着を図った。途中４回の小テストも実施した。１回の進め方としてはその日に提出した文法項目を基本練習から応用まで学生の理解度を考慮しながら進め、会話につなげた。又会話ビデオや聴解タスクなども活用した。

（２）かなについて

プレイスメントテストの結果で、かなの出来なかった学生には事前にワークシートを配布した。授業では第２週目までにかなの読みを全て導入し、その後は単語単位、文単位のディクテーションを行った。

（３）成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、その上で期末試験の結果をもとに小テストや授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

３）今後の課題と反省

全学Ⅰの場合、決まって問題になるのがかなの習得である。今期もかなが負担でコースを続けられなかったと思われる学生が何名かいた。逆に日本語がゼロレベルの学習者でも、かなを習得した者は最後までコースに出席できた。

また、授業数が前期に比べて少ない後期(12 週)を、各課２回のペースが十分に維持できるように 13 週以上の授業時間の確保が、後期においても必要だと考えられる。これは、コース終了時の反省会において担当教員全員が一致した意見でもある。

今期の反省として、事前配布したかなシートについて的確な指示が学生になされなかったこと

があげられる。今後もいずれの形をとるにせよ、かなにおいてはこれまで以上に徹底した指導ができるよう何らかの対策を講じていかなければならない。（齋藤ますみ）

② 日本語Ⅱ

全学向け日本語コースⅡ

・ 受講者：７名（ペルー１名、フランス１名、ポーランド１名、中国４名）
・ 授業時間：５コマ／週　58 コマ
・ 担当教員：斎藤ますみ、澤崎幸江、高瀬公子＊
・ コーディネーター：桑原陽子

１）教科書及び授業の目標

・ 『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）
・ 日本語で簡単なコミュニケーションができるようにする。
　自分の国や自分の専門などについて簡単なスピーチができるようにする。

２）方法

（１）授業方法

26～48 課を学習範囲とし、１課を２コマのペースで行った。３課ごとに復習の時間を設け学習項目の定着を図った。１回の進め方としてはその日に導入した文法項目を基本練習から応用まで行った。各課２コマ目にはビデオを見せて、会話練習につなげた。文法力や聴解能力を高めるため、『文型練習帳』、『聴解タスク』やオリジナルプリントなどを適宜使用した。また、基本的な漢字が読めるようにするため、『みんなの日本語初級Ⅰ漢字練習帳』の漢字を１日５～６字フラッシュカードで読む練習をし、２課毎にプリントで復習させた。

（２）復習テスト・期末テスト

26～33 課、34～40 課、41～48 課をひとまとめとして、復習テストを３回行った。期末テストの範囲は 26～48 課とした。復習テスト、期末テスト共に漢字も 10 点程度の配点で読みの問題を含むこととした。

（３）成績及び評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テストは各５％、期末テストは 85％に換算して総合点で判断した。

３）評価と課題

受講者７名のうち１名は出席率を満たしていたものの、帰国を控えていて、期末テストは受けなかった。受験した６名は優が２名、可が３名、不可が１名という結果だった。日本語Ⅱは学習項目が多いため、３課毎に復習を取り入れ、定着を図る努力をしたが、成績から判断すると、未消化の項目を抱えている学生がいると思われる。出席率が低めだったり、週３回しか出席できないという事情があったりすると、教師サイドでの対応の困難さを感じた。１月に入ってから、26 課からの動詞や漢字の復習を取り入れたのは学生に好評だった。他方、各課から重要な１文を選んで、一覧表を作成したが、今期は十分使いこなせなかった。来期、使い方を工夫したい。

（高瀬公子）

③　日本語Ⅲ

・　受講者：８名
・　授業時間：４コマ／週　45 コマ
・　担当教員：澤崎幸江＊、高瀬公子、村上洋子、敷田紀子
・　コーディネーター：膽吹覚

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：『Intermediate Japanese 中級の日本語』（ジャパンタイムズ）第１課～第１０課
・　初級 300 時間終了程度の学習者を対象に、中級レベルの学生の聴解・会話・読解・作文の４技能の向上をはかる。

２）方法

（１）授業方法

１課をおよそ４コマで終えるペースで授業を進めた。まず、最初の３コマは、『みんなの日本語Ⅱ』の 49、50 課を使用して敬語の学習を行なった。それ以降は、各課３つの「会話」および「読み物」について、それぞれに該当する「単語」、「文法ノート」、「文法練習」を学習し、会話練習および読解練習を行った。読解また、適宜「運用練習」からロールプレイ、聴解、作文も取り入れた。

漢字は、テキストの「書くのを覚える漢字」を読めるようになることを目的とし、「読めればいい漢字」は取り入れなかった。

（２）　復習クイズ

期間中２回復習クイズを実施し、受講生の学習事項の定着具合を確認し、その結果に基づいて、適時指導を行った。

（３）成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テストは各 10%、期末試験は 80%に換算し、総合成績を判断した。

３）評価と課題

初級段階においてはあまり取り扱っていなかった読解練習であるが、短い文章から長い文章へと段階的に読みすすめることにより、少しずつ読解力がついたものと考える。また、各課「先生へのメモ」「私とスポーツ」などテーマに基づき作文練習も行ったが、学生の感想も良好で、今後も作文練習を行いたいという声が聞かれたことから、次のレベルでも引き続き作文練習を行い、より複雑な文章を書く力を養っていけるようにしたい。

敬語の学習にも力を入れ、おおよそは理解できたが、まだスムーズに使えるようになってはいない。今後も敬語がスムーズに使用できるように指導を行っていくことが必要と考える。

（澤崎幸江）

④　日本語Ⅳ

・　受講者：５名（中国４名、韓国１名）
・　授業時間：４コマ／週　47 コマ
・　担当教員：敷田紀子＊、市村葉子、高瀬公子、村上洋子
・　コーディネーター：膽吹　覚

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：『日本語上級読解…30 の素材から見えてくる日本人の「いま」…』（アルク）
・　中上級の読解力、語彙力を養うとともに日本人と日本文化への理解を深める。

２）方法

（１）授業方法

上記のテキストを使って、話題の導入、キーワード確認、読解（速読、難易度が高ければ精読）、内容確認の問題、語彙の問題の順で行い、適宜内容について話し合いを行った。テキストを使用したのは全47コマ中38コマで、そのうち初めの30コマは１課１コマ完結の授業とした。後半の８回は読解文の長さから２コマで１課のペースで進んだ。また、テキストから独立した「活動」を８回設けて、ビデオ視聴や会話練習、敬語運用練習などを行った。小テスト類は行わなかった。

（２）成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、その上で期末試験の結果を基にして授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

３）評価と課題

１月に入って出席学生が減少したが、殆ど毎回出席する学生が数名いて、教科書の各トピックや学習事項について活発な発言や意見交換があり、このレベルにふさわしい授業活動ができた。前期からの申し送りを受けて、上記テキストを選び、大半を各回完結の授業としたので、特定曜日にしか出席できない学生も不利をあまり感じずに出席できたのではないかと思われる。期末試験は４名受験したが、期待通り全員合格した。（敷田紀子）

４．共通教育科目・日本語日本事情科目

《概説》

センター教員は、基礎教育科目・外国語科目としての日本語科目と、教養教育副専攻科目の日・中言語文化系及び日本語・日本文化系科目を担当した。2007 年度の開講科目は以下の通りである。

《2007 年度　開講科目一覧》

科目	開講時間	単位	担当教員
日本語科目			
日本語Ａ	前期火４	２	山中和樹
日本語Ｂ	後期火４	２	膽吹覚
日本語Ｃ	前期火３	２	桑原陽子
日本語Ｄ	後期火３	２	山中和樹
日本語Ｅ	前期火４	２	今尾ゆき子
日本語Ｆ	後期火４	２	今尾ゆき子
日本語Ｇ	前期火３	２	膽吹覚
日本語Ｈ	後期火３	２	桑原陽子
日・中言語文化系　　日本語・日本文化系科目			
応用日本語Ⅰ	前期月２	２	中島清
応用日本語Ⅱ	後期火２	２	中島清
日本の文化	前期木１	２	膽吹覚
日本事情Ａ	前期火１	２	膽吹覚
日本事情Ｂ	後期火２	２	今尾ゆき子
多文化コミュニケーションＡ	後期木１	２	山中和樹
多文化コミュニケーションＣ	前期月２	２	山中和樹

各科目の概要については以下に記す。

＜日本語Ａ＞

【受講生】　４名（正規生４名　非正規生０名）

【目　標】　「テ形」接続・連用中止、「は」と「が」の用法、「のである」文の適切な使い方などを習得し、作文に応用できるようにする。

【教　材】　教科書は指定しない。ハンドアウトを配布する。

【方　法】

・　配布したハンドアウトを解説したあと、練習問題を行う。

・　「は」と「が」の違いを理解した上で、各国の昔話を紹介し、全員で読む。

・　「のである」文を学習したあとで、自己紹介文に応用する。

【評価と課題】

・　４名中２名はまじめに出席し、授業態度もよかった。

・　常時出席の学生が２名ということで、多くの作文に触れることができず、寂しかった。

＜日本語Ｂ＞

【受講生】　２名（正規生２名　非正規生０名）

【目　標】　日本語中級レベルの学生を対象として、大学での論文・レポート作成の一助なるべく、作文能力を養う。

【教　材】　『大学大学院留学生のための日本語②作文編』（アカデミックジャパニーズ）

【方　法】

・　教科書にしたがって、１日１課ずつ進めた。授業後半では課ごとの課題を書かせ、受講生が２名だったこともあり、その場で添削指導を行い、あらためて清書させた。

・　毎回の作文課題を 30%、期末試験を 70%とし、両者を合わせて評価した。

【評価と課題】

・　２名という少人数であったゆえに、細やかな指導ができた。ただ、作文までの討論などでは少人数ゆえに活発さに欠けたことは残念であった。

＜日本語Ｃ＞

【受講生】　13 名（正規生 11 名　非正規生２名）

【目　標】　文型、語彙を拡充し、適切な表現・語彙を使って与えられた映像について、より詳しい説明・描写ができるようになることを目指す。

【教　材】　教科書は指定しない。授業中にハンドアウト等を配布する。

【方　法】

・　教師が用意した 15 回分のＶＴＲ（１回数分）について、詳しく適切に描写する練習を行う。口頭での説明練習後、筆記による確認を行う。主としてペアワークによる活動を行う。

・　授業５回ごとにテストを行い（計３回　配点は各 30 点）、それに平常点（10 点満点）を加算する。

【評価と課題】

・　授業態度は非常に良好で、活発な活動ができた。

・　日本語力が中級に達していない学部留学生が１名おり、全学日本語コースも受講するよう助言した。本クラスのレベルは中級だが、毎年１名程度、初級文法が未定着の学習者が見られる。

それらの学習者に対する対応を考えなければならないと思う。

＜日本語Ｄ＞

【受講生】　10 名（正規生 10 名　非正規生０名）

【目　標】　「テ形」接続・連用中止、「は」と「が」の用法、「のである」文の適切な使い方などを習得し、作文に応用できるようにする。

【教　材】　教科書は指定しない。ハンドアウトを配布する。

【方　法】

・　配布したハンドアウトを解説したあと、練習問題を行う。

・　「は」と「が」の違いを理解した上で、各国の昔話を紹介し、全員で読む。。

・　「のである」文を学習したあとで、自己紹介文に応用する。

【評価と課題】

・　全員出席状況もよく、授業態度もよかった。クラスの雰囲気も楽しいものだった。

・　基本的な助詞の使い方ができていない学生が１名いたが、最後まで何とかついてきた。この学生には他の教員から全学日本語コースも受講するようにとの助言があった。

＜日本語Ｅ＞

【受講生】　９名（正規生４名　非正規生５名）

【目　標】

・　日本語能力１級レベルの文法・語彙習得と読解力を培い、大学の授業に必要な日本語能力を養う。

・　日本語能力１級合格を目標とする。合格者は得点を上げることを目指す。

【教　材】日本語能力［１級］対策問題集、プリント（読解教材、補足練習問題等）

【方　法】

・　日本語能力［１級］対策問題集を使って問題を解いていく。適宜、補足の練習問題を解いて定着を図る。また、読解プリントを使って速読練習を行う。

・　中間試験（40%）、期末試験（50%）と出席点（10%）で、総合的に判断する。

【評価と課題】

・　出席・授業態度は全般的に良好であった。

・　特に、非正規生は熱心に授業に取り組み、成績が著しく向上した。一方、正規生は、全出席あるいは１回程度の欠席と出席率は良いものの、日本語能力はそれほど向上しなかった。大学の授業を受けるのに必要な日本語力を身につけるためには、何らかの方策が必要であろう。

＜日本語Ｆ＞

【受講生】　８名（正規生５名　非正規生３名）

【目　標】

・　日本語能力１級レベルの文法・語彙の習得と長文読解力を養う。
・　日本語能力１級合格を目標とする。合格者は得点を上げることを目指す。
【教　材】　日本語能力[１級]対策問題集、プリント（読解教材、補足練習問題等）
【方　法】
・　日本語能力[１級]対策問題集を使って問題を解いていく。談話レベルの提題表現、接続表現、原因・結果表現、条件表現を取り扱う。また、読解教材を使って長文の速読練習を行う。
・　中間試験（40%）、期末試験（50%）と出席点（10%）で、総合的に判断する。
【評価と課題】
・　出席・授業態度は全般的に良好であった。
・　非正規生は皆出席または１回欠席と出席も良く授業への取り組みも熱心で、成績の向上が見られた。

＜日本語Ｇ＞
【受講生】　20 名（正規生 16 名　非正規生４名）
【目　標】　日本語中級レベル修了者を対象に、大学での講義を聴いたり、テレビやラジオの日本語を聴いたりする聴解力を養う。
【教　材】　『毎日の聞き取りプラス 40』（凡人社）
【方　法】
・　教科書にしたがって、１日３課ずつ進めた。課ごとに、まず１度ＣＤを聞かせ、その後に語彙を導入。次に教科書に従って、課題（ブランクや内容正誤）を行った。そして、聞いた後で、ＣＤの内容について、日本語で質疑応答を行った。
・　授業７回終了時点で中間試験を実施し、それに期末試験を合わせて評価した。
【評価と課題】
・　授業態度は非常に良好で、活発な活動ができた。
・　授業内容が単調になりがちであったことが反省すべき点である。もう少し他の教材を混ぜるか、あるいはアクティビティーを入れるなどの工夫をすべきであった。

＜日本語Ｈ＞
【受講生】　11 名（正規生 10 名　非正規生１名）
【目　標】　新聞の特集記事等を効率よく読むための技術を身につける。また、レポート等に使われる表現を学び、適切な表現を使用してレポートを書く。
【教　材】　新聞記事等の生教材
【方　法】
・　新聞記事を題材に、スキャニング、予測読みの訓練を行った。更に記事の要約、意見文執筆等のレポート課題を課し、書く訓練を行った。
・　８回分のレポート課題（各５点）＋２回分のインタビューテスト（各 25 点）に平常点 10 点

を加算する。

【評価と課題】

・授業態度は大変良好であった。

・上級クラスであることから、それなりに要求の高い課題を出したため、日本語力の低い学習者にとっては負担が大きかったと思う。受講生の日本語力の差が大きい場合の対処を考える必要がある。

＜応用日本語Ⅰ＞

【受講生】　26 名（正規生 17 名　非正規生９名）

【目　標】　日本経済新聞掲載「仕事常識」を通して、日本企業における職場マナーを学ぶ。また、それを通して、現代日本の社会文化を理解する視点を養う、と共に語彙力、理解力、表現力の向上を図る。

【教　材】　日本経済新聞土曜版掲載シリーズ「仕事常識」のプリント

【方　法】

導入として、新聞記事の聴解を通して概略を把握する手法、短時間の速読により概略を把握する手法を交互に実施する。導入後は教材の講読、内容質問（学生による相互質問）等を行う。各回一つの記事を読みきり、次回にその内容に対する試験（記述試験）を実施する。試験については実施の次週に採点返却し、模範解答を配布する。

【評価と課題】

・　成績評価は期末試験、出席率、毎日の試験を総合評価して行うが、出席率も大変よく大半が 100％で、授業態度も良好であった。

・　資格外活動としてのアルバイトだけでなく、卒業後日本国内企業に就職する留学生の数が増えている。日本の企業文化、マナーを学ぶことにより、職場にスムーズに適応できるよう更に記事を厳選していく必要がある。

＜応用日本語Ⅱ＞

【受講生】　28 名（正規生 20 名　非正規生８名）

【目　標】　最近の代表的な恋愛テレビドラマを通して、日本の社会、精神風土を理解すると同時に、微妙な気持ちの表現方法を学ぶ。また、教科書で学んだ日本語の応用形である、短縮形、短縮表現、音便等の理解運用力を養う。

【教　材】　テレビドラマ「Beautiful Life 」全 11 話（各 45 分）

【方　法】　まず、音なし画面を見て、その状況を相手に伝える作業を通し、状況把握力を養う。次に、音声付画面を見て、聴解の練習をする。最後に、シナリオを配布して、理解内容、表現等を確認練習する。毎回、前回の内容に関する試験を行う。そして、実施の次週に採点返却し、模範解答を配布する。

【評価と課題】

・　出席率、授業態度、毎日の試験、期末試験より綜合的評価するが、出席率、授業態度ともに良好であり、所期の目標を達成することができた。
・　本ドラマは高視聴率を博した人気ドラマで、学生にも好評であるが、やや古くなったため、新規ドラマの開拓が課題である。

＜日本の文化＞

【受講生】　24 名（正規生 24 名　非正規生０名）
【目　標】　現代日本の日常生活を紹介したビデオを通して、日本の文化、習慣を学ぶ。
【教　材】　『ビデオ講座　日本語　日常生活にみる日本文化』
【方　法】
・　毎回 10 分から 20 分程度のビデオをみて、そこに登場する文化事象を解説した。
・　受講生には自国の日常生活と比較して意見を述べることを求めた。
・　評価は規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえでレポートの結果をもとに授業態度などを考慮して、総合的に判断した。
【評価と課題】
・　教室がかなり大きくて、この種の授業には不向きであった。今後はパワーポイントを使える中規模教室が望まれる。
・　ビデオを見た後の討論では、受講生が活発に意見を交わしていた。ただし、受講生が中国とマレーシアの 2 カ国であったために、話題の広がりに欠けたことが惜しまれる。

＜日本事情Ａ＞

【受講生】　22 名（正規生 17 名　非正規生５名）
【目　標】　現代日本事情の基礎的事項を学ぶことで、日本・日本人について考える基礎学力を養う。
【教　材】　教員がオリジナルに作成したプリントを配布
【方　法】
・　①日本の象徴、②日本の地理、③福井県の地理、④暦と祝祭日、⑤年中行事と食文化、⑥教育問題、⑦伝統芸能（歌舞伎）、⑧平和と自衛隊、⑨祭り、⑩冠婚葬祭、⑪自然災害、⑫世界遺産、⑬富士山と環境問題、⑭現代日本が抱える諸問題、について、パワーポイントを使い、またＤＶＤなども使用して講義した。
・　評価は規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで期末試験の結果をもとに授業態度などを考慮して、総合的に判断した。
【評価と課題】
・　教室がかなり大きくて、この種の授業には不向きであった。今後はパワーポイントを使える中規模教室が望まれる。

＜日本事情Ｂ＞

【受講生】　３名（非正規生３名）

【目　標】　日本の社会構造や文化、日本人の考え方・価値観を学ぶとともに自国の文化や価値観を再認識する。

【教　材】　ハンドアウト（『日本を知る―その暮らし 365 日―』から抜粋）、プリント、ビデオ：「年中行事としきたり」、ＮＨＫ録画「ゆく年・くる年」など

【方　法】

・　ハンドアウトやビデオで季節ごとの年中行事とそれに参加する日本人の考え方を知る。

・　福井県立歴史博物館と福井市立郷土歴史博物館・養浩館の見学や参勤交代衣装の着付け体験を通して、福井の歴史、風土、産業について学ぶ。

・　俳句のなり立ちと特徴（季語・五・七・五の短詞形式）を学び、句作を行う。

・　成績評価は、見学授業のレポート、句作、ビデオの感想文など７回のレポート提出（50%）、期末レポート試験(40%)、出席点（10%）で行う。

【評価と課題】

・　今回は非正規生のみ３名の授業であった。授業態度は良好であったが、授業中に作成した感想文、宿題として提出したレポートとも、十分なものではなかった。年度により、また受講生によりバラツキはあるものの、今年の受講生の提出物は、内容・分量とも良くなかった。日本語文章作成能力の問題かもしれない。

・　毎年のことであるが、見学授業の成否は特別展示の内容と博物館員の説明のし方に大きく左右される。魅力ある見学先の開拓が必要である。

＜多文化コミュニケーションＡ＞

【受講生】　34 名（正規生 31 名　非正規生３名）

【目　標】　各国の国旗、国歌、伝統的遊び、祝祭日、生活習慣を紹介し、互いの理解を深めることによって、交流を促進する。

【教　材】　教科書は指定しない。ハンドアウトを配布する。ＣＤやＤＶＤも活用する。

【方　法】

・　各国の学生にそれぞれの国歌、国旗等を紹介してもらって、質問する。
　日本に関するものは教員がハンドアウト等を用意し、それについて質疑応答する。

【評価と課題】

・　他国のことだけでなく、自国のことも知らないことが多く、自国のことを紹介する上でも有益だとの感想が多かった。

・　今回は欧米の留学生がいなかったで、ヨーロッパの文化に触れられないのが、残念だった。

＜多文化コミュニケーションＣ＞

【受講生】　34 名（正規生 31 名　非正規生３名）

【目　標】　各国の国旗、国歌、伝統的遊び、祝祭日、生活習慣を紹介し、互いの理解を深めることによって、交流を促進する。

【教　材】　教科書は指定しない。ハンドアウトを配布する。ＣＤも活用する。

【方　法】

・　各国の学生にそれぞれの国歌、国旗等を紹介してもらって、質問する。
　日本に関するものは教員がハンドアウト等を用意し、それについて質疑応答する。

【評価と課題】

・　他国のことだけでなく、自国のことも知らないことが多く、自国のことを紹介する上でも有益だとの感想が多かった。

・　今回はドイツの留学生もいたので、ヨーロッパの文化にも触れられて、よかった。